

症例検討(1)

大腿骨近位部陥入型骨折の1例

旭川赤十字病院 整形外科 森 井 北 斗 加 茂 裕 樹
高 橋 滋 小野沢 司

【はじめに】

大腿骨近位部骨折は特に不安定型の場合、治療に苦慮することがある。

手術治療を行った不安定型大腿骨近位部骨折に関して検討を行った。

【症例】

74歳，男性．転倒により左股関節痛が出現．受傷後5日，骨折を指摘され当院に救急搬送された．

既往歴；透析歴17年，ASO

初診時，全身状態は特に問題

なく，左股関節痛以外は特に

疼痛の訴えはなかった．X線

にて左大腿骨転子部骨折の診

断とした．(Evans 分類 type

1 group 3，Jensen 分類

type 4，AO 分類31A2.2) 受

傷同日に手術を施行した．

上記の症例をプレゼンテーションし，不安定型大腿骨転子部骨折の治療について文献を踏まえて検討する．



術後1年

症例検討(2)

手根骨脱臼骨折の一例

札幌医科大学 高度救命救急センター 入 船 秀 仁

高エネルギー外傷による手根骨脱臼骨折を経験したので報告する。

【症例】22歳，男性．フェリー船上で作業中に誤って約10m 下の埠頭に墜落し受傷．ドクターヘリにて当センター搬入．搬入時はショックバイタルで，両下肢の麻痺と右下腿の変形を認めており，FAST 陽性であったため，緊急開腹施行となった．帰室後のCTにて胸腰椎の脱臼骨折，破裂骨折，脳挫傷，肺挫傷を認めていた．脊椎の固定術後抜管し，意識状態は比較的クリアであった．この際に右手関節部，左肘関節部の疼痛を訴えたため，精査を行ったところ，右手根骨の脱臼骨折，左肘関節脱臼骨折を認めた．

右手根骨脱臼骨折は舟状骨貫通月状骨掌側脱臼に他の手根骨骨折を合併したもので，OTA 分類では70-Bであった．舟状骨は大まかには4-partでOTA72-B2，月状骨は背側の剥離骨片(OTA71-A)を認め，三角骨にも剥離骨折(OTA75-A2)があり，有頭骨骨折も合併(OTA73



X線正面



側面

—A) していた。この症例に対し、受傷後12日目に観血的手術を施行した。

X線画像を提示する。本症例の治療法についてご検討いただきたい。

症例検討(3)

距舟関節脱臼を伴った踵骨粉碎骨折の一例

旭川医科大学 整形外科 阿部 里見 能地 仁
佐々木 祐介 松野 丈夫

【症例】44歳，男性。【職業】重機のオペレーター。

【経過】飲酒後交通事故による単独損傷で午前2時30分救急外来搬入。頭部打撲，四肢および下口唇裂傷のほか，画像検査にて右距舟関節脱臼，舟状骨骨折，踵骨粉碎骨折，左踵骨粉碎骨折，下歯槽骨骨折を認めた。両足関節に対し外固定がなされ救急部入院。午前11時30分当科診察。右足背動脈微弱で冷感を認めた。即座に，鎮静下で距骨脱臼を徒手的に整復し，足背動脈触知良好となり冷感の改善を認めた。翌日より両足部に水疱形成を認め処置開始。受傷20日後，右足関節に対し骨移植を伴う距舟，距踵，踵立方関節固定術を施行。外固定を併用した。左は骨移植を伴う踵骨骨接合術を施行。術後19日目に右踵創部皮膚壊死および褥創が出現し創処置開始。術後43日目に熱発あり手術創深部感染と判断し，右踵部の一部内固定金属を抜去し，壊死創の皮膚形成と縫合および創外固定術を行った。2ヵ月後に創外固定抜去し右PTB装具装着下での歩行訓練開始し，その約1ヵ月後退院。抗生剤内服投与は3ヵ月継続した。骨癒合得られ，約4ヵ月でPTB装具除去。現在術



受傷時



手術直後



術後1年